

ほんのしるべ

# 書標

2018.  
8月号

2018年8月5日発行（毎月1回5日発行）  
通巻477号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可



## 世界の本屋さん

vol.80

### ルーマニア・ブカレスト カルトウレシテイ書店

ノセ事務所  
熊勢 仁



ルーマニアは人口一九七六万人（二〇一六年）で、面積は日本の六十%である。独裁者チャウシェスクが失墜してから約三十年が経過し、社会主義体制は薄れている。ブカレストの旧市街にあるブカレスト大学周辺に書店街があった。新刊書店、古書店、古本屋等バラエティに富んでいた。

カルトウレシテイ書店は、地元のサイトでは、世界一美しい本屋と紹介されていた。白を基調にした明るい優雅な書店である。旧市街のリブスカニ通りにある間口六間、奥行三十間の大型書店である。一階から四階まで店の中央部分は吹き抜けになり、天井からの自然採光で広さ、開放感を感じる。

一階売場の左翼は趣味の文具、実用生

活用品売場である。右翼は洒落たチャイナ売場である。

陶器、急須、土瓶、茶器、皿などがある。通訳のベルザール・ニナタさんに、この東洋感覚を担当者に聞いてもらった。日本趣味の社員がいて、お客様にも好評だという。ホビーの書棚には茶道・盆栽・華道・武道の本が面陳列されていた。一階突き当りに階段とエレベーターがあった。二階は本だけの売場である。左翼は心理・宗教・哲学・社会・政治・経営学などの専門書、右翼は伝記・文学に特化した充実した棚であった。三階は写真集・ホビー・芸術・辞書・こどもの本。四階は催事場、レストスペース、事務室。地階はコミック・フィギュア・CD・料理であった。

かけて行くにつれ、アンナの耳の中では風がごうごうとつなりました。アンナは、声をかぎりに叫び、うたいました。あれはいつだったでしょう。夏のある朝、こんなふうな風に吹かれて、こんなふうな幸せな気持ちで、堤防の上を走ったことがあったのを、アンナは思い出しました。

ジョン・G・ロビンソン著

『風』のマーニー(下)

(岩波少年文庫)より



もくじ

世界の本屋さん 80

「書標」歳時記(8月)

著書を読む(88) 『風に恋う』

額賀 滯

1

書標・書評 『ふわふわ』ほか

特集 経済学の正しい使い方

柄谷行人書店

10 6 4

今月のおすすめ

社会科学	16	コンピュータ	18
自然科学	19	医学書	20
人文科学	21	文学・文芸	22
文庫・新書	23	芸術	24
実用書	25	地図・旅行書	25
語学・辞典	26	児童書	27
コミックフロアより			
インフォメーション			
本屋うらばなし「通勤時間と読書」			
	30	28	

※表示価格はすべて本体価格です。

# 『風に恋う』

額賀 滢



いつかもう一度、吹奏楽の小説を書こうか。  
二〇一五年に松本清張賞をいただいたデビュー作『屋上のウインドノーツ』（文藝春秋・二二〇〇円）が刊行されてからずっと、そう思っていました。

小説が一本完成すると、たとえその作品にどれだけ熱量を込めて書いたとしても、時間が経つにつれてそこで描ききれなかったことが見えてきます。

「もし違う主人公や舞台設定だったら、こんな展開もアリだったかもしれない」

同じテーマで別の話を書いてみたいと思わせてくれたとき、私はその小説を「書いて正解だった」と感じます。

『屋上のウインドノーツ』はまさにそんな小説で、デビューからずっと、「また吹奏楽の小説が書きたいな」「次はこんな話にしてみたいな」とぼんやり考えていました。

文藝春秋の担当編集から「王道のコンクールものを書きましよう」と提案されたのは、昨年の一月です。箱根駅伝の話で盛り上がり、当時中央大学陸上競技部で一年生ながら主将を務めていた舟津彰馬選手の話題が出たことが、『風に恋う』のスタートです。

「吹奏楽部に入学した一年生が、黄金世代のOBであるコーチに部長を任命される」という物語の骨格は、ここから生まれました。吹奏楽部の物語ですが、実はスタートは駅伝の話題だったのです。四月には実際に舟津選手への取材も行い、『風に恋う』を作りあげるための取材と思案の日々が始まりました。

この物語に欠かせなかったもうひとつの存在が、練習を取材させていただいた埼玉県立越谷北高校吹奏楽部です。ほとんどの生徒が四年制大学への合格を目指す進学校なのですが、吹奏楽部の部員達も例に漏れず、勉強と練習を必死に両立させていました。作中で主人公・基が通う千問学院高校や、吹奏楽部の部員達の姿が、この取材の中で輪郭を持っていたことを鮮明に覚えていきます。

若者、ちゃんとしるなあ。

『風に恋う』の取材中、私が一番感じたことです。若者はみんな、ちゃんとしている。何かに一生懸命になりながら、自分のこれからの懸命に見つめている。誰だ、「今の若者は」なんて失礼なことを言うのは。

舟津選手もそうですし、越谷北高校吹奏楽部のみなさんも、全日本吹奏楽コンクールを取材する中で出会った吹奏楽に熱中

する多くの高校生が、数年後、大人になったときに、自分の生きた社会や世界に、そして《大人》に《大人になっていく自分》に、幻滅したり失望したりすることがないといい。『風に恋う』を書きながら、ずっとそんなことを思っていました。

『屋上のウインドノーツ』が自分の中の引き出しをひっくり返して必死に書いた小説だとしたら、『風に恋う』はたくさんの人の縁を繋いで書いた小説です。それは、私が作家になってからの三年の時間を掛けて得たものだったのだろうと思います。

だからこそ、ここで「キラキラの青春小説」を書いていいのだろうか？という疑問にもぶち当たりました。

「青春小説」「主人公は高校生」「部活もの」「吹奏楽」なんていわれたら、部活動に青春を捧げて爽やかな汗を流し、涙を流し、友人とぶつかったりライバルと競ったり恋をしたり……などという眩しい眩しい物語を多くの人は想像します。大人は「若いっていいなあ」「自分の高校時代を思い出すなあ」としみじみして、中高生は「主人公に共感した」「今の自分と重ね合わせたい」と胸を熱くする。青春小説が好きで、青春小説で作家デビューをして、青春小説を書いて作家を続けてきたのですから、私も当然、そう思っています。それが青春小説の面白さで、醍醐味で、多くの人が「この小説はこう来るだろう」と想像するものです。

けれど、これだけ多くの人の声を聞いて、私より年下なのに私より余程しっかりしていて、悩みながらも頑張っている人の姿を見た上で、果たしてそういう青春小説にしてみました。いいものか。平成最後の夏に送り出されるこの青春小説には、《今だから書けたこと》《今、読まないといけないもの》があるんじゃないか？

ないか？

そんな自問自答の中で形成されたのが、もう一人の主人公・瑛太郎です。彼はいわゆる「キラキラの青春小説」の主人公として高校時代を送り、大人になった今、自分の進路に迷って過去を忌々しく思うまでになってしまっています。そんなとき、《きらびやかな青春》を過ごした母校の吹奏楽部を指導することになり、基と出会います。

かつて謳歌した《きらびやかな青春》は、大人になった彼等に何を与えるのか？ その問いかけの答えが、『風に恋う』という物語です。「青春はかつてのもの」と思う人にこそ、「若いっていいな」ではなく、今の自分と重ね合わせながら読んでほしい一冊です。



『風に恋う』

額賀 滯・1,600円



## 『ふわふわ』

谷川俊太郎・工藤直子著

スイッチ・パブリッシング・二〇〇〇年  
小学生のころから、国語の教科書で詩の世界に親しむ機会があった。おそらく、初めて詩に触れたのは、谷川俊太郎さんと工藤直子さんの作品であったと思う。二人の作品は、思わず声に出したくなるような言葉の繰り返しの楽しさ、他人の紡ぎだす言葉を通じて外の世界を見る面白さを教えてくれるものだった。

『ふわふわ』は、谷川さん、工藤さんのお二人が二〇〇一年から二〇一七年にわたって行った五回の対談をまとめた対談集だ。幼いころの思い出、子供のころに好きだった本、家族との関わり、どのように詩作に向き合ってきたのか……。これらの対談から、二人の詩と人柄が深く結びついていることがきくと感じられるだろう。

巻頭・巻末に収録された、お互いにあった詩は特に見逃せない。谷川さんは工藤さんに向けて「ナオコマンダラ」という詩を書いている。その詩は、「ナオコ

人間の女が似合っていないと思う」という言葉から始まる。この文を読んだだけで、二人の関係性が伝わってくるようで、ほほえましい気持ちになってしまった。

その年齢であったから書くことのできた詩というものがあると思うが、お二人の詩と、詩を書きながら考えていることについて読んでいるとなお一層、そのことが実感できた。これから先、谷川さん、工藤さんのお二人がどのような詩を発表していくのか、今後も楽しみだ。

詩というものに、何を表現しているのかよくわからない、といって構えてしまう人もいる。詩は本来、心の思うままに楽しむものではないか。ぜひ本書のふわふわした対話をきっかけに、気軽に詩を味わっていただきたい。

(齊)

## 『巨悪』

伊兼源太郎著

講談社・一七五〇円

納得できない。何もかも。本の帯に書かれた文字が、怒りで歪んで見える。

舞台となる東京地検特捜部が扱う事件は政治家や官僚の汚職、経済事件である。

現代のニュースを見るにつけ、事件がすつきり解決し、気持ちが軽くなること

あるのだろうか。現代の巨悪はたちが悪く、見えにくい。故にもやもやとしたものが残り、納得できない。何もかも。である。

東京地検特捜部の検事・中澤源吾と特捜部機動捜査班の事務官・城島毅は、高校時代野球部のダブルエースであった。

城島が言う「納得できないな。何もかも」中澤が「俺もだ」と。この言葉が哀しい響きを放つ。二人には檢察の道を選んできたと言っても過言ではない。悲しい過去の出来事にとらわれ、がんじがらめになる二人。その二人の距離のとり方に切なさを覚える。

脇を固める人物、美人の同僚検事・その事務官、そして、酸いも甘いも知る中澤につく事務官。キャラクターが魅力的で読み手を小説の世界へ引っ張っていく。

手ぬぐい配布の公職選挙法違反捜査を発端に政治家の汚職、キートとなる水、和菓子屋の領収書、隠された暗号。過去の収賄事件を彷彿とするトリック、カラクリに現実にあるのではと思ってしまう。

二人の哀しい出来事と追っている事件のバズルが合わさった時、何とも言えない感慨が。

檢察という組織を題材にしたミステリはあまりない。著者はこのテーマで、また書かれるとのこと、注目していきたい。(マ)

### 『明日の前に 後成説と合理性』

カトリヌ・マラーブー著

人文書院・三八〇〇円

「思弁的実在論」と呼ばれる現代哲学の潮流、とりわけメイヤスの『有限性のあるあと』は、世界や実在を人間主観との関わりにおいて把握しようとする西欧近現代哲学の「相関主義」を徹底的に批判、人間主観を外した実在を思考しようとする。メイヤスの批判の矛先は、根本的には西欧近現代哲学の源であるカントの超越論哲学に向けられる。

だが、哲学の歩みは常に先人の思索への批判の歴史であり、近現代哲学も、自らを担保するカントの「超越論的なもの」への疑念の歴史であった。マラーブーは、その歴史を丹念に辿り、メイヤスの糾弾を「これまでの一連の疑念を先鋭化させた」ものと評価しながら、カントその人の思索の深化にこそ、「一連の疑念」への応答、乗り越えを見出していく。

即ち、第一批判(「純粹理性批判」)か

ら第三批判(「判断力批判」)へとカントの「超越論的なもの」が変容していく中に、メイヤスよりも「いつそう斬新で、いつそうラディカル／根源的な偶然性の意味」を見出していくのだ。

重要なのは、カントが単に形而上学的伝統の中で思索しているのではなく、同時代の自然科学、とりわけ生物学に周到な目配りをしていったことだ。自身、現代の遺伝学、脳科学などを積極的に参照するマラーブーは、カント哲学に今日の(ヘッジネテイクス)の先取りを見て取る。

メイヤスの「反乱」は、逆説的に、あるいは「後成説」的に、カント哲学の射程の広さと、その後継である近現代哲学の可能性そのものを開くことに、大きく貢献したのである。(フ)

### 『烏百花 八咫鳥外伝 蛍の章』

阿部智里著

文藝春秋・一四〇〇円

昨年刊行された第六巻をもって第一部が完結した、累計一〇〇万部突破の人気シリーズ初の外伝、「恋」がテーマの短編集だ。八咫鳥の住まう山内という異界を舞台としたこの作品は、読み続ける悦びに溢れている。

単行本の第三巻が、発売からしばらく

たつてから売れていくようになった。入荷したそばから売れていき、「この前入れたばかりなのに」と思いながら補充を繰り返していたら、ついに一時商品が手に入りづらくなってしまった。文庫で二作目を読んだ方の多くが、刊行を待ち切れずに単行本を買い求めているのだ。この熱は、より多くの読者へと広がっていった。

異なる世界を大胆に現出させる、細やかで流れるような文体は、一筋縄ではいかない登場人物の心情を、時に激しく、時に儂く描き、読み手のこころを強く揺さぶる。それでもこの作品が甘くならず、むしろ硬派な印象を受けるのはなぜか。主観に対する疑いが、常にそこにあるからではないだろうか。そのひとつととしての真実を誠実に描き出すことによって、鮮やかに景色をひっくり返す。一作ことほもちろんのこと、シリーズを通して、自分が抱いていた世界観を心地よく裏切られる。

このスピノフが面白くないわけがないのだ。主要人物がいわゆる「恋」をおろそかにしがちなため、乙女読者にとっては待望の、そうではない読者にとっても、作品世界により一層の興行きを与える本作は、ゆえに珠玉の作品集なのである。(乃)

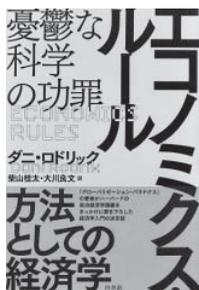
# 経済学の正しい使い方

二〇〇八年のリーマン・ショック直後、エリザベス女王から「なぜ誰も予測できなかったの？」と問われ、頭を抱えた経済学者たちの姿に溜飲を下げた人は多かったらしい。数学を駆使し、政治への影響力が大きく、ノーベル賞の部門もある「社会科学の女王」——経済学に対する、他分野の研究者や一般市民の目は思いのほか厳しい。経済危機の責任は間違った指針を与えた経済学者にあるのではないか？ 理論に現実を強引に押し込めていないか？ それは実のところ「科学」なのか？——失われた信用を取り戻すために、経済学はどこへ向かうのか？

『エコノミクス・ルール 憂鬱な科学の功罪』（白水社／ダニ・ロドリック著／一八〇〇円）

典型的な経済学批判は、理論の土台となる仮定が非現実的で、複雑な社会現象を単純な枠組に還元してしまうというものだ（たとえばホモ・エコノミクス＝経済合理性を唯一の行動基準とする人間像）。だがロドリックは言う。経済学はモデルの集まりであり、唯一無二の普遍のモデルなど存在しない。社会の変化に

合わせて古いモデルが新しいモデルに置き換わるのではなく、増殖していくのである。たしかにリーマン・ショックを防ぐことはできなかったが、経済学には危機やバブルを解明し克服する学説も無数にある。そして重要なのは、目の前の現実を分析するのにどのモデルをどう適用するか、ということだ。状況次第で、市場の自由化が正しいことも、政府の介入が正しいこともある。それを見極めるのは、科学というより技芸＝アートの問題である、と。



『エコノミクス・ルール』

『ゲーム理論はアート 社会のしくみを思いつづけたための繊細な哲学』（日本評論社／松島斉著／二〇〇〇円）

『予想どおりに不合理 行動経済学が明かす「あなたがそれを選ぶわけ」』（早川書房（ハヤカワ文庫）／ダン・アリエー

著／九〇〇円)

『ヤバイ経済学 悪ガキ教授が世の裏側を探検する(増補改訂版)』(東洋経済新報社／ステイヴン・D・レヴィット他著／二〇〇〇円)

近年の経済学は、政治学・社会学・心理学・人類学などの知見を盛り込んだ多様な展開を見せている。元々は主流派経済学への批判の意味が強かったと思われるが、今ではゲーム理論や行動経済学がむしろ主流の様相を呈する局面もあるし、当の「主流派経済学」のほうも高度に細分化され、とうてい一括りにはできなくなってきた。ここに挙げた三冊には、「これが経済学？」と驚く人もいるのではないだろうか。

『ゲーム理論はアート』では、「全体主義は日常的に起こりうるか」「貧困の救済にはどんな困難があるか」「なぜハラメントは起こるのか」等々、ただ詳細を調べ上げてもかえって混乱が増すような難題が掲げられる。事の本質に迫るには、芸術家が作品を生み出すのと同じように、社会のしくみを表現するモデルを創造しなければならぬ。それは論理的で比較検証が可能でありながら、人々の

心のひだも織り込まれている必要があるだろう。本書では、たとえばアーレントの「悪の凡庸さ」もゲーム理論という名の「数学」によって分析されている。

『予想どおりに不合理』は、心理学の知見を取り入れた行動経済学の本。手弁当ながらがんばるが、安い報酬を出されるとやる気が失せる。消費者が支払ってもいいと考える金額は、じつは簡単に操作されてしまう。ホモ・エコノミクスどころか、私たちの行動は不合理だらけだが、しかし「予想どおりに不合理」だ。規則性があつて、何度も繰り返ししてしまうため、予測もできる。企業が行動経済学をマーケティングに利用しているのは理の当然なので、乗せられたくない人は知っておいたほうがいい。

『ヤバイ経済学』の著者はシカゴ大学経済学部の教授だが、専門は「日々の出来事や謎」だそう。大相撲の八百長は証明できる。「米国の犯罪減少に影響を与えたのは中絶の合法化である」等、ちょっとヤバイのも混じったテーマを統計データで分析しまくり、間違った常識やインチキを暴露する。経済学とはインセンティブ(人々の意思や行動を導く誘

因)の分析である、という定義があるが、著者によれば、人がインセンティブにどう反応するかを測る統計的手法が経済学にはいくらでもあるそう。あとはデータがあればいい。

『21世紀の貨幣論』(東洋経済新報社／フェリックス・マーティン著／二六〇〇円)

『中央銀行が終わる日 ビットコインと通貨の未来』(新潮社(新潮選書)／岩村充著／一四〇〇円)

貨幣は物々交換の不便から生まれた一つの商品であり、その価値は他の商品と同じように決定される、というのが一般的な経済学の説明である。だが現実には物々交換だけで成り立っている経済は、歴史学でも文化人類学でも一つも見つかっていない。『21世紀の貨幣論』によれば、マネーの本質はその起源から「モノ」ではなく「信用」を軸とした社会的な技術であるのだが、お金をモノとする「正統的」貨幣観は現代に深刻な問題を引き起こしているという。なぜ金融危機を予測できなかったのか、というエリザベス女王の質問に対する著者の答えは単純明快である。「マクロ経済を理解する

ための大きな枠組みに、マネーが組み込まれていなかったからだ。」

『中央銀行が終わる日』は、日銀出身の経済学者による現代の貨幣論。中央銀行の本来の役割は、貨幣価値の安定とよりよい決済手段の提供である。そこがおろそかにされ、大規模な金融緩和への失望が世界中に広がるなかで、ビットコインのような新しい挑戦者があらわれた。

国家によって価値を保証されない仮想通貨が、なぜお金として機能するのか。その技術と価値創出のしくみに関する本書の丁寧な解説は、逆に、空気のように私たちをとりまく通貨システムが本当に普遍的なのかという疑問に導く。同様に、誰もが常識と思っていた金融政策はもはや景気対策として「効き目を失いつつあるばかりでなく、それを意義あるものとする合意基盤すら揺らぎつつある」という。中央銀行が本場に求められる役割とは何か、仮想通貨はマネーの流れをどう変えるのか。金融政策と仮想通貨という二つのドラマは、「やがて影響し合い絡み合いながら進行し始める」。

『善と悪の経済学 ギルガメシウ叙事詩』

アニマルスピリット、ウォール街占拠』(東洋経済新報社/トーマス・セドララチエク著/三四〇〇円)

自然科学をモデルとし、高度に数学化された実証科学として歩んできた経済学も、複雑で多様な人間社会を対象であることに変わりはない。現代の経済学がどれだけ価値中立性を装っても、たとえば効率や成長、快楽の至上主義が暗黙の前提としてある。倫理の真空地帯は存在し得ず、切り離そうとすれば(もしかしたら非人間的な)別の倫理が作り出される。それが経済政策から規律を喪失させ、巨額の債務をもたらしたのではなかったか? 「どんな経済学も、結局のところは善悪を扱っている」とチエコのエコノミストは言う。アダム・スミスの真意は『国富論』より『道徳感情論』に示され、ケインズは経済学を「モラル・サイエンス」と呼んでいた。経済学をもっと大きな器として、哲学、神学、人類学、歴史学等と接続させ、失われた経済思想をよみがえらせようとする本書は、ギルガメシウ叙事詩に始まり、旧約聖書、古代ギリシヤ、キリスト教、デカルトと続く。経済学の祖とされるスミスが登場するの

は半ばを過ぎてからという、オルタナティブな経済学史である。

『経済史 いまを知り、未来を生きるために』(有斐閣/小野塚知二著/四〇〇円)

大学の教科書的な体裁からオーソドックスな経済史かと思いきや、およそ人文社会科学を学ぶ者であれば避けて通れない重大テーマをことごとく噛み砕こうとするような野心作。冒頭に提示される問いは、経済はなぜ成長するのか、人類はなぜ十万年も生きながらえたのか、経済は実際どのように成長してきたのか、というものである。全編を貫く仮説は「際限のない欲望」という人間の特殊な性格だが、当然一筋縄ではない。人類は長い間、欲望を野放しにせず規制する仕組みを社会と内的規範に組み込むことによって存続してきた。人が己を際限のない欲望の持ち主であることを認めたがらず、それを「資本という外的な存在」に仮託するという迂回を選んだのもその反映である。しかし近現代、欲望は単に制約から解放されただけでなく、人為的に維持され、さらに創出されるまでになった。

今また、経済と社会は大きく揺れ動いている。これまで人類が遭遇してきた転換期において、次代を構想するユートピアがいくつも唱えられたが、その多くがデイストピアしかもたらさなかった。「実際の時代の転換とは、実は小さく弱い規範の試行錯誤の取捨選択と集積だった」という指摘は、現在を理解し未来を展望する方法としての経済史の意義をも示している。

『贈与の歴史学 儀礼と経済のあいだ』  
(中央公論新社(中公新書) / 桜井英治著 / 八〇〇円)

日本の中世は自給自足の時代などではない。多くの物資が商品として流通し、需要と供給のバランスで価格が決定され、銀行さながらの業務を行なう金融業者もいた。ところが面白いことに、市場経済の発展は贈与経済の異常な発達をも促すのである。とりわけ十四〜十五世紀の贈与慣行は、世界的にも類を見ない「極端に功利的な性質」を帯びていた。贈答品の使い回しなどは序の口で、幕府は財源に組み込むわ、寺社主催の贈答品オークションが開かれるわ(落札した品は贈

答に再利用)。さらには、品物を伴わず先に送られた「折紙」という贈答目録がそのまま第三者に贈与・売却されて約束手形のように飛び交っていた。あらゆるものが使用価値よりも交換価値で計られ譲渡可能となる、極限の贈与経済は近代資本主義経済に驚くほど近い。というより、贈与経済と市場経済とは「一般的に信じられているほど対立的なものではない」ようだ。歴史は直線的には進まない。「過去が現在よりもつねに素朴だと思っ

異を唱えるのは難しい。だがそれは本当に自明のことなのか? 経済のモラルには多くの混乱がある。義務と負債は本来違うものだが、私たちには義務を負債の論理で考えてしまうという根深い傾向があり、そこには暴力と貨幣による数量化という二つの要因が深く関わっている、とグレイバーは言う。「暴力に基盤を置く諸関係を正当化しそれをモラルで粉飾するためには、負債の言語によって再構成する以上に有効な方法はない」。

権の移転という、資本主義の根幹に関わるような経済活動が、中世ほど容易にできた時代も少ないのである。

著者は「われわれは九十九パーセントだ」というスローガンを造出し、ウォール街占拠運動の理論的支柱として知られる人類学者、「負債」を基礎とする貨幣の五千年史を膨大な事例で描き、経済現象に関する固定観念をより深いところから揺さぶる大著である。

『負債論 貨幣と暴力の5000年』(以文社 / デヴィッド・グレイバー著 / 六〇〇〇円)

(白水社・渋谷)

金融危機に至る過程でどれだけ「念の入った詐欺」があったとしても、救済されたのは当の金融機関だけだった。破局を免れるにはやむを得ないのだからと。一方で、一般市民のローン地獄や途上国の債務超過がいかに苛酷でも、「借りたカネは返さねばならない」という倫理に

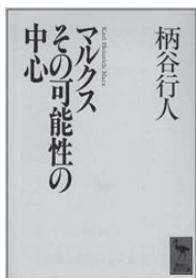
\*愛書家の楽園・特集「経済学の正しい使い方」で紹介した書籍は、ジュンク堂書店池袋本店一階エレベータ前と福岡店三階、丸善名古屋本店一階と京都本店地下二階にて、八月十日〜九月九日までフェア展開中です。

# 柄谷行人書店

(題字・柄谷行人)

ジュンク堂池袋本店の作家書店企画に、第二十七代目店長として柄谷行人氏をお迎えしました。柄谷氏の著作はもちらん今まで読んできた本、書評をした本など幅広い分野から約七百点を選んで頂き、フェアを開催中です。日本を代表する哲学者・批評家である柄谷氏による、いまの世に読むべき古典を三回に分けてご紹介します。出版社で品切れになっているものも、今回の作家書店に合わせて揃えることができました。

今月はまず柄谷氏の著書を中心に、二〇〇五年以降朝日新聞で書評したものを紹介します。



『マルクス  
その可能性の中心』

## 柄谷行人の著書

柄谷氏の著書は膨大な数になります。その中からご本人が選んだものが、その中から以下三十七点がリストアップ

プされています。

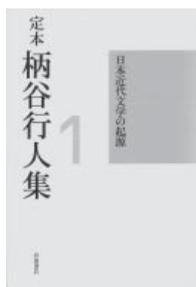
『思想はいかに可能か』(インスク립ト  
／二二〇〇円)

『畏怖する人間』(講談社文芸文庫／一五  
〇〇円)

『意味という病』(同／一一〇〇円)

『マルクスその可能性の中心』(講談社学  
術文庫／九三〇円)

『反文学論』(講談社文芸文庫／一二〇  
〇円)



『定本 柄谷行人集  
日本近代文学の起源』

『定本柄谷行人集 日本近代文学の起源』

(岩波書店／二八〇〇円)

『定本 日本近代文学の起源』(岩波現代

文庫／一三六〇円)

『日本近代文学の起源 原本』(講談社文

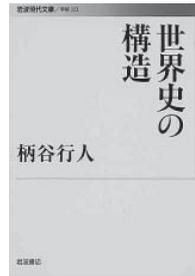
芸文庫／二二〇〇円)

『定本柄谷行人集 隠喩としての建築』

(岩波書店／二六〇〇円)

- 『内省と遊行』（講談社文芸文庫／一七〇〇円）
- 『探究 I・II』（講談社学術文庫／九六〇円、一一七〇円）
- 『新版 漱石論集成』（岩波現代文庫／一五四〇円）
- 『坂口安吾と中上健次』（講談社文芸文庫／一五〇〇円）
- 『倫理21』（平凡社ライブラリー／八四五〇円）
- 『日本精神分析』（講談社学術文庫／一〇五〇円）
- 『トランスクリティーク カントとマルクス』（岩波現代文庫／一六〇〇円）
- 『近代文学の終り 柄谷行人の現在』（インスクリプト／二六〇〇円）
- 『世界共和国へ』（岩波新書／八二〇円）
- 『世界史の構造』を読む（インスクリプト／二四〇〇円）
- 『柄谷行人中上健次全対話』（講談社文芸文庫／一三〇〇円）
- 『柄谷行人運實重彦全対話』（講談社文芸文庫／二二〇〇円）
- 『政治と思想 1960・2011』（平凡社ライブラリー／一〇〇〇円）
- 『哲学の起源』（岩波書店／二二〇〇円）

- 『柳田国男論』（インスクリプト／二六〇〇円）
- 『遊動論 柳田国男と山人』（文春新書／八〇〇円）
- 『柄谷行人インタヴューズ 1977・2001』（講談社文芸文庫／一七〇〇円）
- 『柄谷行人インタヴューズ 2002・2013』（同／一七〇〇円）



『世界史の構造』

- 『世界史の構造』（岩波現代文庫／一三六〇円）
- 『帝国の構造 中心・周辺・亜周辺』（青土社／二二〇〇円）
- 『定本 柄谷行人文学論集』（岩波書店／三二〇〇円）
- 『憲法の無意識』（岩波新書／七六〇円）
- 『言葉と悲劇 柄谷行人講演集成1985・』（ちくま学芸文庫／二二〇〇円）
- 『思想的地震 柄谷行人講演集成1995・』（同／一〇〇〇円）
- 『坂口安吾論』（インスクリプト／二六〇〇円）
- 『柄谷行人書評集』（読書人／三二〇〇円）
- 柄谷行人編集、編著、訳書など。
- 『近代日本の批評Ⅰ 昭和篇 上』（講談社文芸文庫／一四〇〇円）
- 『近代日本の批評Ⅱ 昭和篇 下』（同／一三〇〇円）
- 『近代日本の批評Ⅲ 明治・大正篇』（同／一五〇〇円）



『必読書150』

- 『必読書150』（太田出版・二二〇〇円）
- 『現代という時代の気質』（ちくま学芸文庫／エリック・ホフファー著／柄谷行人訳／一〇〇〇円）
- 『共産主義者宣言』（平凡社ライブラリー／カール・マルクス著／金塚貞文訳／柄

谷行人付論／一〇〇〇円)

『マルクスの現在』(とっても便利出版部  
／柄谷行人他著／一六〇〇円)

『小さなもの』の思想』(文春学藝ライ  
ブラリー／柳田国男著／柄谷行人編／  
一四八〇円)

『夏目漱石「こころ」をどう読むか』(河  
出書房新社／石原千秋責任編集／柄谷行  
人×吉本隆明講演収録／一七〇〇円)

『アメリカのユートピア 二重権力と国  
民皆兵制』(書肆心水／フレドリック・  
ジェイムソン著／スラヴォイ・ジジェク、  
柄谷行人他共著／三五〇〇円)

『坂口安吾全集 01〜17、別巻』(筑摩書  
房／柄谷行人、関井光男編集／六六〇〇  
〜一六〇〇〇円)

『中上健次発言集成 1〜6』(第三文明  
社／柄谷行人、桂 秀実編集／二五二四  
〜二九一三円)

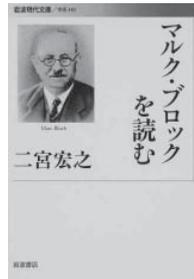
『中上健次集 1〜10』(インスクリプト  
／二八〇〇〜四〇〇〇円)

『笑いオオカミ(津島佑子コレクション)』  
(人文書院／津島佑子著／柄谷行人解説  
／三四〇〇円)

## 柄谷行人の思想

『柄谷行人の思想』(青土社・一三〇〇円)

『a t プラス 01、02、03、06、09、10、  
11、15、18、21、23、24、25、26、27、  
28』(太田出版／一三〇〇〜一四〇〇円)  
『社会運動 414〜419』(インスク  
リプト／各七〇〇円)



『マルク・ブロック  
を読む』

## 書評

二〇〇五年以降、朝日新聞書評欄で柄  
谷行人が取り上げたもの。

『マルク・ブロックを読む』(岩波現代文  
庫／二宮宏之著／二二六〇円)

『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』  
(トランスビュー／マーク・R・マリ  
ンズ著／三八〇〇円)

『関係としての自己』(みすず書房／木村  
敏著／三六〇〇円)

『層としての学生運動 全学連創成期の

思想と』(スペース伽耶／武井昭夫著／  
三二二〇円)

『傍観者からの手紙 FROM LONDON  
2003・2005』(みすず書房／外  
岡秀俊著／二〇〇〇円)

『生きる意味 「システム」「責任」「生命」  
への批判』(藤原書店／イバン・イリ  
イチ著／三三〇〇円)

『マルチチユード 〈帝国〉時代の戦争と  
民主主義 上・下』(NHKブックス／  
アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート  
著／各一二六〇円)

『黒いアテナ 古典文明のアフロ・アジ  
アのルーツII 上・下』(藤原書店／マ  
ティン・パナール著／上巻四八〇〇円、  
下巻五六〇〇円)

『「みんなの意見」は案外正しい』(角川  
文庫／ジェームズ・スロウィッキ著／  
八四〇円)

『思索日記I 1950・1953 新  
装版』(法政大学出版局／ハンナ・ア  
レント著／六二〇〇円)

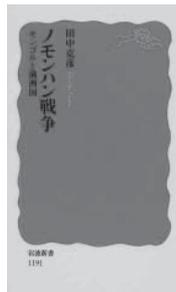
『漱石という生き方』(トランスビュー／  
秋山豊著／二八〇〇円)

『反ファシズムの危機』(岩波書店／セル  
ジョ・ルッツァット著／二二〇〇円)

『アメリカ憲法の呪縛』(みすず書房／シエルドン・S・ワリン著／五二〇〇円)  
 『朝鮮通信使をよみなおす』『鎖国』史観を越えて』(明石書店／仲尾宏著／三八〇〇円)  
 『アナキスト人類学のための断章』(以文社／デヴィッド・グレーバー著／二二〇〇円)  
 『獄中記』(岩波現代文庫／佐藤優著／一〇〇〇円)  
 『金と芸術』(グラムブックス／ハンス・アピング著／三四〇〇円)  
 『抵抗の場へ あらゆる境界を越えるために』(洛北出版／マサオ・ミヨシ×吉本光宏著／二八〇〇円)  
 『日韓歴史共通教材 日韓交流の歴史』(明石書店／二八〇〇円)  
 『再発見 日本の哲学 廣松渉 近代の超克』(講談社学術文庫／小林敏明著／八〇〇円)  
 『人類の足跡 10万年全史』(草思社／ステューヴン・オッペンハイマー著／二四〇〇円)  
 『文化人類学とわたし』(青土社／川田順造著／二二〇〇円)  
 『暴力はどこからきたか 人間性の起源

を探る』(NHKブックス／山極寿一著／九七〇円)  
 『古代インド文明の謎』(吉川弘文館／堀暁著／一七〇〇円)  
 『稲作渡来民 「日本人」成立の謎に迫る』(講談社選書メチエ／池橋宏著／一七〇〇円)  
 『K・A・ウィットフォーゲルの東洋的社会論』(社会評論社／石井知章著／二八〇〇円)  
 『選挙のパラドクス なぜあの人が選ばれるのか?』(青土社／ウィリアム・パウンドストーン著／二四〇〇円)  
 『民主主義への憎悪』(インスクリプト／ジャック・ランシエール著／二八〇〇円)  
 『先史時代と心の進化』(武田ランダムハウスジャパン／コリン・レンフルー著／二二〇〇円)  
 『芸術崇拜の思想 新装復刊』(白水社／松宮秀治著／四〇〇〇円)  
 『現代帝国論 人類史の中のグローバルゼーション』(NHKブックス／山下範久著／一〇七〇円)  
 『吉本隆明の時代』(作品社／桂 秀実著／二八〇〇円)  
 『長い20世紀 資本、権力、そして現代

の系譜』(作品社／ジョヴァンニ・アリギ著／五二〇〇円)  
 『市民結社と民主主義 1750・1914』(岩波書店／シュテファン・ルートルヴィヒ・ホフマン著／二二〇〇円)  
 『伊勢神宮』(講談社／井上章一著／二八〇〇円)  
 『ノモンハン戦争 モンゴルと満洲国』(岩波新書／田中克彦著／八四〇円)  
 『オスマン帝国はなぜ崩壊したのか』(青土社／新井政美著／二四〇〇円)  
 『印象派はこうして世界を征服した』(白水社／フィリップ・フック著／二二〇〇円)  
 『ドゥルーズとガタリ 交差的評伝』(河出書房新社／フランソワ・ドス著／六九〇〇円)  
 『精神病院を捨てたイタリア 捨てない



『ノモンハン戦争  
モンゴルと満洲国』

- 日本 (岩波書店 / 大熊一夫著 / 二六〇〇円)
- 『天使はなぜ墮落するのか 中世哲学の興亡』(春秋社 / 八木雄二著 / 四八〇〇円)
- 『パララックス・ヴェー』(作品社 / スラヴォイ・ジジエク著 / 六八〇〇円)
- 『アマゾン文明の研究 古代人はいかにして自然との共生をなし遂げたのか』(現代書館 / 実松克義著 / 三八〇〇円)
- 『ユダヤ人の起源 歴史はどのように創作されたのか』(ちくま学芸文庫 / シュロモー・サンド著 / 一八〇〇円)
- 『絆と権力 ガルシアールマルケスとカストロ』(新潮社 / アンヘル・エステバン他著 / 一三〇〇円)
- 『日本人と参勤交代』(柏書房 / コンスタンチン・ヴァポリス著 / 四八〇〇円)
- 『宗教とは何か』(青土社 / テリー・イーグルトン著 / 二四〇〇円)
- 『反米の系譜学』(ミネルヴァ書房 / ジェームズ・W・シーザー著 / 五五〇〇円)
- 『古代ローマ人の24時間 よみがえる帝都ローマ』(河出文庫 / アルベルト・アンジェラ著 / 九五〇円)
- 『仏教と西洋の出会い』(トランスビュー / フレデリック・ルノワール著 / 四六〇〇円)
- 『量子の社会哲学 革命は過去を救うと猫が言う』(講談社 / 大澤真幸著 / 二二〇〇円)
- 『黄金の夢の歌』(講談社文庫 / 津島佑子著 / 九八〇円)
- 『災害ユートピア なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』(亜紀書房 / レベッカ・ソルニット著 / 二五〇〇円)
- 『世界史のなかの中国 文革・琉球・チベット』(青土社 / 汪暉著 / 二八〇〇円)
- 『ジェイコブズ対モーゼス ニューヨーク都市計画をめぐる闘い』(鹿島出版会 / アンソニー・フリント著 / 三〇〇〇円)
- 『いま、憲法は「時代遅れ」か (主権) と (人権) のための弁明 (アポロギア)』(平凡社 / 樋口陽一著 / 一五〇〇円)
- 『本音で語る沖繩史』(新潮文庫 / 仲村清司著 / 五九〇円)
- 『近代日本の中国認識 徳川期儒学から東亜協同体論まで』(以文社 / 松本三之介著 / 三五〇〇円)
- 『イスラームから見た「世界史」』(紀伊國屋書店 / タミム・アンサーリー著 / 三四〇〇円)
- 『日米衝突の根源 1858・1908』(草思社 / 渡辺惣樹著 / 三五〇〇円)
- 『自己啓発病』社会 「スキルアップ」という病に冒される日本人」(祥伝社 黄金文庫 / 宮崎学著 / 五九〇円)
- 『自己と他者の統治』(筑摩書房 / ミシエール・フーコー著 / 五九〇〇円)
- 『未完のファシズム 「持たざる国」日本の運命』(新潮選書 / 片山杜秀著 / 一五〇〇円)
- 『フロイト講義 (死の欲動) を読む』(せりか書房 / 小林敏明著 / 二五〇〇円)
- 『狼の群れと暮らした男』(築地書館 / ショーン・エリス著 / 二四〇〇円)
- 『民主主義のあとに生き残るものは』(岩波書店 / アルンダティ・ロイ著 / 一六〇〇円)
- 『マックス・ウェーバーの日本 受容史の研究 1905・1995』(みすず書房 / ヴォルフガング・シユヴェントカー著 / 七五〇〇円)
- 『妖怪学の祖 井上圓了』(角川選書 / 菊地章太著 / 一七〇〇円)
- 『褐色の世界史 第三世界とはなにか』(水声社 / ヴィジジャイ・プラシヤド著 / 四〇〇〇円)
- 『忘却のしかた、記憶のしかた 日本・

アメリカ・戦争』（岩波書店／ジョン・W・  
ダワー著／三〇〇〇円）  
『ゾミア 脱国家の世界史』（みすず書房  
／ジェームズ・C・スコット著／六四〇  
〇円）

『いま読むベロー「昔話」』（羽鳥書店／  
工藤庸子著／二〇〇〇円）

『民主政治はなぜ「大統領制化」するの  
か 現代民主主義国家の比較研究』（ミ  
ネルヴァ書房／トーマス・ポグントケ他  
編／八〇〇〇円）

『カフカらしくないカフカ』（慶応義塾大  
学出版会／明星聖子著／二四〇〇円）

『琉球独立論 琉球民族のマニフェスト』  
（バジリコ／松島泰勝著／一八〇〇円）

『哲学を回避するアメリカ知識人 プラ  
グマティズムの系譜』（未来社／コーネ  
ル・ウエスト著／五八〇〇円）

『社会主義 その成長と帰結』（晶文社／  
ウイリアム・モリス著／二三〇〇円）

『紙の砦 自衛隊文学論』（インパクト出  
版会／川村湊著／二〇〇〇円）

『江戸日本の転換点 水田の激増は何を  
もたらしたか』（NHKブックス／武井  
弘一著／一四〇〇円）

『世論調査とは何だろうか』（岩波新書／

岩本裕著／八〇〇円）

『現代アジアの宗教 社会主義を経た地  
域を読む』（春風社／藤本透子著／四二  
〇〇円）

『戦後日本の宗教史 天皇制・祖先崇拜・  
新宗教』（筑摩選書／島田裕巳著／一七  
〇〇円）

『日本の精神医学この五〇年』（みすず書  
房／松本雅彦著／二八〇〇円）

『福沢諭吉の朝鮮 日朝清関係のなかの  
「脱亜」』（講談社選書メチエ／月脚達彦  
著／一八五〇円）

『ヒトとイヌがネアンデルタール人を絶  
滅させた』（原書房／バット・シップマ  
ン著／二四〇〇円）

『花の忠臣蔵』（講談社／野口武彦著／二  
二〇〇円）

『シャルリとは誰か？ 人種差別と没落  
する西欧』（文春新書／エマニュエル・  
トッド著／九二〇円）

『文化進化論 ダーウィン進化論は文化  
を説明できるか』（N.T.T出版／アレッ  
クス・メスデーイ著／三四〇〇円）

『教皇フランシスコ キリストとともに  
燃えて 偉大なる改革者の人と思想』（明  
石書店／オースティン・アイヴァリー著

／二八〇〇円）

『セネカ哲学する政治家 ネロ帝宮廷の  
日々』（白水社／ジェイムズ・ロム著／  
三四〇〇円）

『人類進化の謎を解き明かす』（インター  
シフト／ロビン・ダンバー著／二三〇  
〇円）

『世界マヌケ反乱の手引書 ふざけた場  
所の作り方』（筑摩書房／松本哉著／一  
三〇〇円）

『セカンドハンドの時代 「赤い国」を生  
きた人々』（岩波書店／スヴェトラナ・  
アレクシエーヴィチ著／二七〇〇円）

『宣教師ザビエルと被差別民』（筑摩選書  
／沖浦和光著／一五〇〇円）

『虜囚 一六〇〇〜一八五〇年のイギリ  
ス、帝国、そして世界』（法政大学出版  
局／リンダ・コリー著／七八〇〇円）

『殺生と戦争の民俗学 柳田國男と千葉  
徳爾』（角川選書／大塚英志著／二〇  
〇〇円）

柄谷行人選書のいま読むべき文学・哲  
学などの古典、思想・政治経済の書目リ  
ストは、来月号から掲載いたします。

今月の  
おすすめ

社会科学

雪ぐ人

佐々木健一著 著者はテレビのディレクターで、この本は以前NHKで放送された番組を書籍化したものである。

日本の刑事裁判の有罪率は九十九・九%と言われている。そこに立ち向かう、冤罪弁護士と異名を持つ今村核氏にスポットを当てた内容。過去の凄惨実績や、仕事仲間からの人物評、そしてプライベートや生い立ちに至るまで、取材は広範囲に及んでいる。放送時には割愛されたような部分も本書には盛り込まれているので、番組を見た方でももう一度楽しめる一冊となっている。

NHK出版

一五〇〇円

ごみ収集という仕事

藤井誠一郎著

私たちは毎朝のように街角でごみ収集車を目にしている。なのに、そんな身近な清掃行政に、無関心で無知だったこと

を、本書を読むと思えば知らされる。

若手の研究者が新宿区で九か月にわたる収集を体験し、現場に立つことで見えてくる問題点などを書いている。ふれあい指導や、子どもへの環境教育といった方面にも触れてある。今まで何気なくごみを出していたけれど、清掃行政は奥が深いと考えさせられた。

コモンズ

二二〇〇円



対立の世紀

イアン・ブレマー著

トランプ大統領

誕生やブレグジットなど、既存の権力を批判して怒れる民衆の支持を得る動きが世界中で起こっている。著者はそこに「われわれ対彼ら」の対立の図式を見る。グローバルズムで世界の貧困は劇的に減少したが、格差もまた拡大し、先進国でも

途上国でも人々の不安や怒りは増すばかりだ。既に激しい対立のある国、まだ表面化していない国があるが、全世界が不安定さを有していることは確かだろう。

対立を煽ることからは何も生まれない。困難ではあるが、政府にも民間にもいくつかの打開策はあるという。我々はこの難局をうまく克服できるだろうか。

日本経済新聞出版社

一八〇〇円



金持ち課税

税の公正をめぐる経済史

ケネス・シーヴス著

デイヴィッド・スタサヴェージ著

二人の政治学者による富裕層への課税についての歴史をまとめたもの。

まず、これまでの議論を「平等な扱い論」、「支払い能力論」、「補償論」の三つに分類し、通説や論拠を検証している。

次いで、欧米各国の税の統計を駆使し、富裕層への累進課税が選択される条件を探索した。結果として、富裕層への累進課税は国家や時代ごとの政治的要因で変化し、これからも累進課税の議論と葛藤は絶えないものと見ているようである。

みず書房

三七〇〇円

## 20億人の未来銀行

合田 真著

植物燃料の製造・販売事業を展開している著者の、アフリカでの新規事業を取り上げた一冊。

本書は、現地に新しい金融サービスを設定させるといふ、自身が「やる価値がある」と感じられる目標に日々取り組む著者が、現場で感じた今日の経済システムの課題や、真に必要なテクノロジーとは何かという問いを、著者の本事業と現地アフリカの人々に対する熱い思いと共に、リアルに読者に届けてくれる。

日経B P社

一五〇〇円

## 「共感報道」の時代

谷 俊宏著

日本を大きく変えた3・11。それは報道の世界も例外ではなかった。

これまでの報道では記者は個を殺し、淡々と事実を追いかけることに終始していた。しかし、3・11の圧倒的被害を前に取材記者は思わず涙した。それは被取材者に自分の気持ちを分かってくれたのだと思わせ、信頼のある関係が構築された。「共感報道」の誕生だ。

共感とは同情とは違う。傍観者として伝えるのではなく、当事者と同じ目線を持つて一人称で語るということだ。

花伝社

一五〇〇円



## 炎上とクチコミの経済学

山口真一著

ネットメディア関連を専門に研究している著者が、最新のSNS事情について、科学的データをもとにわかりやすく解説した一冊。

SNSは便利な反面、炎上というリス

クもついてまわる。炎上対象が企業であれば、多大な経済的損失につながるおそれもある。しかしこれからの時代、ビジネスにうまく活用できた会社こそが勝ち組になっていくはずである。過去に起きた炎上事例を分析し、今後の広報や宣伝活動に役立つコツを伝授してくれるという内容。とても実践的な印象を受けた。

朝日新聞出版

一五〇〇円

## マルチプル・ワーカー「複業」の時代

山田英夫著

近年副業が注目される背景として、終身雇用と年功賃金の崩壊、人手不足、人生百年時代の到来などがある。本書は副業を成功させるハウツー書ではなく経営者や人事担当者、副業に興味を持ち始めている方等に向けて書かれている。

実際に副業を認めている企業や個人の事例をあげており、副業を認めた経緯や導入後の変化などがわかる。副業の解禁後離職率が減った企業もあり、興味深い。企業や個人へのアンケート調査によると副業解禁派が増えており、キャリアの選択肢を持つべきと提言されている。

三笠書房

一五〇〇円

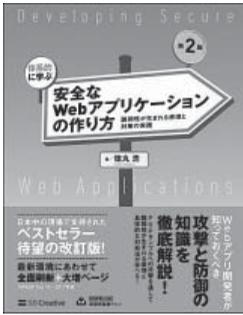
**今月の  
おすすめ**

**コンピュータ**

**体系的に学ぶ安全なWebアプリ  
ケーシヨンの作り方 第2版**

徳丸 浩著 Webセキュリティの第一人者である著者の名前をとって「徳丸本」と呼ばれ親しまれてきた定番書が、七年ぶりに改訂。SQLインジェクションやクロスサイトスクリプティングなどのメジャーな攻撃手法の紹介から、発生しやすい脆弱性バタンの原理とその対策まで。さらに実習環境としてMacにも対応した。Webアプリのセキュリティに関わる人なら、必ず読んでおきたい。

S B クリエイティブ 三二〇〇円



**スラスラ読めるJavaScript  
ふりがなプログラミング**

及川卓也監修 リブローワークス著  
発売前からSNSで大きな注目を集めていた本書。その理由はコードにふりがなと読み下し文をつける、いままでにないスタイルにある。初学者が陥りがちな「何が書かれているか見ても分からない」を回避しつつ、くり返し読むことで理解を確かなものにするができる。同時発売の『Pythonふりがなプログラミング』（同社・一八五〇円）と併せて読みたい。

インプレス 一八五〇円

**G〇言語でつくるインタプリタ**

Thorsten Ball 著 設楽洋爾訳

インタプリタとは、ソースコードをコンピュータが解釈可能な形式に逐次変換しながら実行するプログラムのこと。本書ではMonkeyという本書のために設計された独自のインタプリタを、シンプルかつ読みやすいG〇言語をつかって実装していく。字句解析や構文解析について順を追って学びながら、普段触れることのないインタプリタの秘奥に迫る。

オライリー・ジャパン 三四〇〇円

**CAREER SKILLS**

ジョン・ソーンメズ著 長尾高弘訳

前著『SOFT SKILLS』（同社・二八〇〇円）はエンジニアの人生全体をハックする本だったが、今回はキャリア形成に焦点をあてたもの。たとえば大学でコンピュータ科学の基礎を学ぶことには大きな意味があるが、学費や四年間の拘束などのデメリットがあり、独学プログラマーを選択すれば逆の長短を引き受けることになる。シビアな内容だが、著者独特のユーモアがそれをやわらけている。

日経BP社 三三三三円

**あなたを支配し、社会を破壊する、  
AI・ビッグデータの罠**

キャシー・オニール著 久保尚子訳

ビッグデータを解析する数理モデルが適切なものでなかったとき、それは「数学破壊兵器」となる。大手ヘッジファンドのデータサイエンティストだった著者が、ビッグデータ経済に警鐘を鳴らす。ベストセラー『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社・一五〇〇円）の新井紀子氏イチャオシの一冊。

インターシフト 一八五〇円

今月の  
おすすめ

自然科学

北歐式  
眠くならない数学の本

クリスティン・ダール著

スヴェン・ノードクヴィスト絵

枇谷玲子訳

冒頭から「セーターを編む者は数学者である」「数学用語は国際語である」などのパワーワードが炸裂する。だが難しくはない。フィボナッチ数列やフラクタルといった、数学嫌いが字面だけ見たらソツと本を閉じてしまいそうな内容が読み終える頃には理解できている。

本書はスウェーデンでベストセラーとなった初学者のための数学本。本文が判りやすく書かれているのは勿論だが、長年親しまれている秘密は全ページにある挿絵。どれも箸休めのカットではなく、すべて内容を補うものとなっている。加えて「やってみよう」というコラムが随所にあり、遊び気分で数学を実践できる。このバランス感覚は見事なもので、眠く

なっている暇はない。紙とペンを手元に読み、糊とハサミもあればなお楽しめるだろう。

三首堂

一四〇〇円



「自然」という幻想

多自然ガーディングによる

新しい自然保護

エマ・マリス著

岸 由二・小宮 繁訳

ある島嶼を、過去あった状態に戻す保全・再生計画は、「過去の自然に似た島々」で地球を飾るということに過ぎない。手つかずの自然とは幻想であり、近年になってアメリカで文化的に作り上げられたものである。そのようなロマンチックなヴィジョンは捨て、悪質な開発をやめ、今日の前にある人工的自然に目を向けよ

うと著者はいう。

しかし、それだけではない。作家・中上健次は、『紀州 木の国・根の国物語』（角川文庫・六四〇円）というルポルタージュで、故郷で見慣れたセイタカアワダチソウの群生を見、根に毒を持ち、アメリカ原産の外来種であるその植物に、侵略者と被抑圧者の関係を感じる。中上はその後の小説作品で、外来種が混淆した世界を描いた。本書が、新たな保全活動の提唱だけで終わらないのは、「外来種の混淆した世界」多自然ガーディングが、侵略者・被抑圧者の関係を包含した共同体の可能性を示しているからである。

草思社

一八〇〇円



今月の  
おすすめ

医学書

急性期病院で実現した  
身体抑制のない看護

小藤幹恵著

急性期において「患者の安全確保」「人員不足」などの理由で身体拘束が行われている。そのため身体状況が悪化し、かえってケアの困難さが増すケースも出る。また抑制することで、本当は必要な看護師の手と目、心が遠ざかることを招いてしまう。多くの看護師がジレンマに悩みながら業務を行っている。

本書は、「高度急性期医療の場での抑制しない看護へのチャレンジ」で「抑制ゼロ」を実現させた金沢大学附属病院の取り組みを紹介する。ホスピタリティを追求し、看護師一人ひとりが倫理的意識を高め「人を大切にする看護」を進めてきた。毎日がチャレンジと緊張の連続の中で成し遂げられたのは、まさに「看護のチカラ」と言える。抑制ゼロへの取り組みが全国に広がっていくことを願う。

日本看護協会出版会 二八〇〇円

閃めく経絡

ダニエル・キーオン著

須田万勢・津田篤太郎監訳 建部陽嗣訳

原著は英国で二〇一四年に出版され、現在もベストセラーとなっている。最新の発生学の知識と伝統医学をつなぎ、経絡・経穴を読み解く。

医道の日本社 二八〇〇円

結局現場でどうする？

Dr. 増井の神経救急セミナー

増井伸高著

めまい・頭部外傷・脳卒中などの神経救急領域の診療「センス」を養うことを目的に著者が企画した教育セミナー「SENCE」の活字版（書籍化）。研修医・非専門医は知識だけでは対応しきれない「結局現場でどうするの？」という問題を抱えている。本書は、ワークシヨップ形式で画像に頼らないめまい診療方法・NIHSSをとるコツ・ERから専門医へつなぐ脳卒中治療などのセミナー内容をわかりやすくまとめている。エビデンスを散りばめながらも、それを超えて現場

場で実際どうしているかを伝授する。またシリアルナンバーで三十七本の関連動画を無料閲覧できるので合わせて学習できる。知っている知識からできる臨床スキルに変えよう。

日本医事新報社 四二〇〇円

病院というヘンテコな場所が  
教えてくれたコト。

仲本りさ著

本書は現役看護師が病院で働きながら、日々起こった出来事を描き続けた絵日記を取めたイラストエッセイ本。病院にはスタッフ、患者とさまざまな年代の老若男女がおり、元気になる人もいれば生死に関わる重篤な人もいる。初めて余命わずかな患者さんの担当になったこと、先輩からの厳しい指摘、先生から気づかされ学んだこと、友人である同期から勇気をもらったり……。

病院という場所で働いているからこそ見えてくる「普通」という日常のありがたさ、楽しさ、悲しみ、悔しさ。

この本を読み終わったあと、心に何かが響いてくるだろう。

いろは出版 一一〇〇円



## 人文科学

### 孤独の発明

または言語の政治学

三浦雅士著

言語はコミュニケーションの手段としてのみ存在するのではなく、「他者」「世界」について、また「私」の認識を人間にもたらしした。またそれは同時に人間が孤独であることの始まりとなった。言語を獲得することにより、人間は何を失い何を得たのか。現代に存在する社会活動、社会問題の全ての起源となる言語について迫る大著。

講談社

三五〇〇円

### 歴史学者と読む高校世界史

教科書記述の舞台裏

長谷川修一・小澤 実編著

いま高校の歴史教育が激動の時代を迎えていることをご存知だろうか。二〇二二年度から日本史と世界史を統合した「歴史総合」が必修科目になるが、中

学までと大学からは旧態依然の日本史・世界史別の教育が続くため、高校の歴史教育とはどうあるべきかが議論されている。

本書では歴史学者、高校教員、元教科書調査官といった執筆陣が、高校教科書と歴史学との齟齬や、教科書検定及び大学入試という制約と歴史学のせめぎ合いについて語る。

勁草書房

二五〇〇円

### 宗教改革2・0へ

ハタから見えるキリスト教会の

マルとバツ

松谷信司編著

昨年が宗教改革から五〇〇周年であるとして、キリスト教界隈では盛り上がりを見せていたが、宗教改革はなにも五〇〇年前に完結したわけではない。本書では、五〇一年目の宗教改革として、クロスオーバーする十八人がこれまでのキリスト教会とこれからのキリスト教会について語り、ハタからの視点によって拓かれる「宗教改革2・0」へとバージョンアップを試みている。

ころから

一六〇〇円

### デザインされたギャンブル依存症

ナターシャ・ダウ・シユール著

ギャンブル依存症になると、もはや金銭目的ではなく、ギャンブルという行為そのものを求めるようになるという。そのような状態になる過程には何が起きているのか？ 本人の意思の問題と思われがちな依存症だが、依存症は自分の外部からつくられることがあるということが本書ではよく分かる。気鋭の文化人類学者による一冊。

青土社

二八〇〇円

### 佐々木正美の子育て百科

入園・入学前に親がしておきたいこと

佐々木正美著

児童精神科医である著者が、日常の臨床的な仕事の中で学んだり教えられたりしてきた具体的な事例の数々を、内外の研究者や臨床家の理論や提言と照合し、今日の社会で子育ての基本として役に立ちそうな事例をまとめた一冊。子どもの名医・佐々木正美の最後のメッセージ。入園・入学前のお子さんがいる親御さんは特に必読の書である。

大和書房

一六〇〇円

## 今月の おすすめ

### 文学・文芸

#### 十三階の神

吉川英梨著

公安の秘密組織「十三階」に所属する黒江律子を主人公とした『十三階の女』（双葉社・一五〇〇円）の続編。発売時期が偶然にも重なったが、かつて地下鉄テロを起こした新興宗教団体の教祖の死期が迫っているという状況を背景にした公安組織の混乱と「十三階のモンスター」として前作よりもパワーアップした律子の姿が描かれる。

誰も心からは信用できない公安ならではの厳しい状況に、二転三転する本当の敵の姿……。最後の最後まで息もつかせぬ展開で引きつけるサスペンス小説。

双葉社

一五〇〇円

#### 下町ロケット ゴースト

池井戸 潤著

待望の『下町ロケット』シリーズ最新刊。今回は、佃製作所がダイダロスとい

うエンジンメーカーによって、大口取引先のひとつを失う所から始まる。佃製作所は、否応なしに戦略の見直しを迫られる。一方、帝国重工も社長交代によって、スターダスト計画に暗雲が立ち込めてきた。財前部長にも転機の予感……。

この小説の魅力は、やはりモノづくりにかける主人公の情熱にあるだろう。ただ単純な職人的な町工場の賛歌だけではなく、法廷闘争や会社経営、銀行の存在など、現実的なエピソードを絡ませることによって、テンポ良く、メリハリのあつた小説に仕上がっている。法廷シーンはおなじみの神谷弁護士も登場し、読みどころのひとつとなっている。

佃社長をはじめ、経理部長の殿村（立川談春氏の演技が忘れられない）、技術開発部長の山崎、営業部長の津野・唐木田ら、いつものメンバーが顔を揃え、これまたいつも通りに、活路を見出すべく悪戦苦闘を重ねていく。最後には顔なじみのメンバーとの別れがあつたりと、今後は目の離せない展開になっている。今秋には早くも続編の刊行が予定されている。楽しみに待ちたい。

小学館

一五〇〇円

#### 夏目漱石とクラシック音楽

瀧井敬子著

夏目漱石が作家活動を始めたのは三十年代。それまでは大学の講師であった。しかし、漱石は神経衰弱や胃を悪くしていたのもあつて非常に心が不安定で、家族、特に妻の境子と些細なことでも喧嘩することがあつた。

そんな中、愛弟子であつた寺田寅彦はコンサートに連れ出そうと声をかけ、東京のホールへ出掛けたのをきっかけに、夏目家にヴァイオリン・ピアノが置かれ、家の中で演奏会を開くこともあつたという。その後、夏目漱石は、寅彦を翻訳係のように伴つて演奏会に出掛けるようになるのだが、この本はそんな当時のエピソードと共に、当時の明治→大正時代にはどんな演奏会があつたのかを記録し、そして漱石の演奏会に詳しい周りの人々とのやり取りが面白く描かれている。日本人として初めてイギリスのロイヤル・アルバート・ホールに行った人物は漱石か？と思わせるようなエピソードも綴られているなど、夏目漱石ファン必見の一冊。

毎日新聞出版

二五〇〇円



## 文庫・新書

高校野球を100倍楽しむ

ブラバン甲子園大研究

梅津有希子著

春と夏の高校野球大会をスタンドから盛り上げるのが吹奏楽の応援である。曲を聴けば学校名がわかるほどの伝統校や強豪校の特徴ある素晴らしい応援を思い出す高校野球ファンも多いのではないだろうか。その応援の要である吹奏楽、「ブラバン」に注目した最初の本である本書が、単行本刊行時からの新しい流れを追加して文庫化された。

有名校のオリジナル応援を学校ごとに解説。吹奏楽部の顧問の先生や部員たちの高校野球に対する熱い思いが伝わってくる。さらに「高校野球の応援にはなぜ懐かしのアニメソングやヒット曲が多いのか？」などの謎や疑問、大会を裏側から支える吹奏楽部、地域同士のつながりなどぐっとくるエピソードが満載。まさに「高校野球を100倍楽しむ」

ことができる。この夏の大会はブラバンに注目だ。

文春文庫

六九〇円

片思い探偵 追掛日菜子

辻堂ゆめ著

女子高生の追掛日菜子は、好きになつた人を全力で追い掛けずにはいられない、生粋のストーリーキング体質。若手の舞台俳優や、外国人力士、天才子役。はては総理大臣と、好きになつた人の情報をひたすら集め続けることを生きがいとしている。しかしそんな彼女の、推し、たちは、なぜか事件に巻き込まれることが多い。日菜子は、推し、の疑惑を晴らすために、殺人容疑や不倫スキャンダルなど、推し、が巻き込まれた事件を、ストーリーキング行為で集めた情報をもとに解決していくのだが……。

ミステリーの探偵役というのは、おおよそ個人的なことが多いものだが、この物語の主人公・追掛日菜子もそんな個人的な探偵の一人。「何があっても推しに迷惑はかけない」を信条に、犯罪一歩手前どころかバレたら犯罪レベルのストーリーキング行為を繰り返している。しかしそ

うして集めた情報が、結果的に彼女の推し、たちを助けることに繋がっていくのだから、一概に否定しづらいのがなんとも言えないところだ。

幻冬舎文庫

六九〇円

日本百銘菓

中尾隆之著

帰省や旅行、出張で日本各地へ出かけたりするときにつきものなのが「お土産」。せっかくだからその土地の銘菓を味わいたいものである。そんな時に役立つ銘菓のガイドブックが新書で刊行された。四十年にわたって日本各地を旅してまわり銘菓を食べてきた著者が、その経験を元に、お土産にぴったりの様々な条件をクリアした百品を選定した。

「店への義理やしがらみはまったくない」立場から選んだ納得の百品、どれもこれも味わってみたい逸品揃いで、今すぐにも旅に出たくなってしまう。

自分の住んでいる地域からは何が選ばれているのかを見るのも楽しく、手土産を選ぶときの参考にもなりそう。

NHK出版新書

一〇〇〇円

今月の  
おすすめ

芸術

入江明日香作品集

風のゆくえ 生命の真影

入江明日香著

版画を切り取ってカラージュシ、水彩  
絵具で着色して仕上げる。ミクストメ  
ディアという手法で独自の世界観を作り  
上げた入江明日香の初作品集。

基本は人物画なのだが、そこに草花や  
鳥、神話の登場人物、日本的なエッセ  
ンスを一枚の絵の中に散りばめている。一  
歩間違えれば混沌としてしまいそうなア  
イテムを無理なく溶け込ませ独自の世界  
を作り上げる。絵のテーマは風化と再生、  
過去と現在、相反する世界を共存させ独  
特の色彩で作られる世界はどこか童話の  
世界のようにストーリー性を感じる。

最初の印象は深みのある青色だった。  
どこかで出会ったような青は浮世絵の山  
や海を思わせる日本的な色だった。この  
青を実際の作品でぜひ見てみたい。

東京美術

二四〇〇円

フジコ・ヘミング  
14歳の夏休み絵日記

フジコ・ヘミング著

フジコ・ヘミングについて知っている  
かと問われたら、多くの人はその人生を  
波乱万丈と形容するのではないだろう  
か。ある人は聴力を失ったことを語るか  
もしれないし、情感溢れる演奏風景を語  
るかもしれない。

だが今回の書籍はそんな彼女の人生が  
始まったばかり、まだ少女だった頃の絵  
日記をベースに編まれている。

絵日記が描かれたのは一九四六年、敗  
戦の翌年の夏。当時を振り返るエッセイ  
には食料不足で栄養失調になり、頭痛や  
水虫に悩まされる様子、疎開先での生活  
が綴られる。戦争によって青春を奪われ  
た少女がいた。

一方で絵日記に描かれた絵は鮮やかで  
洋服の模様も細かく描かれており、当時  
からお洒落にも興味があったことがうか  
がえる。ピアノのこと、弟と母との暮ら  
し、食べ物のこと、等身大の少女がそこ  
かしこにいて何とも可愛らしく感じる。

暮しの手帖社

二二二五円

空想映画地図「シネマップ」

アンドリュウ・デグラフ絵

A・D・ジェイムソン文

観終わった映画の内容を思い返してみ  
ると、物語の中で登場人物たちが辿った  
旅の足跡を、完璧に繋げられないことが  
ある。場面転換があるため仕方ないこと  
なのだが、その空白部分を想像で埋めた  
くなる方も多いのではないだろうか。

本書はそういった思いに応える作品  
集。映画内の世界が一枚のイラスト地図  
に纏められ、そこに登場人物達が通った  
道筋が描き込まれる。可視化された行動  
の動線を眺めるだけでも、鑑賞当時の感  
動が思い起こされ楽しめるが、作品理解  
をより深めたい方向けに映画研究者の解  
説も添付する。作者は一作品のために数  
十回映画を鑑賞し、描き上げるまで千時  
間を費やす程の情熱ぶり。ファンアート  
として始めたそうだが、今では生みの親  
である監督達にも購入されている。

今回収録されたのは、二百以上あった  
候補作のうち、三十五の地図。シリーズ  
化され、次回作が制作されることを期待  
せずにはられない。

フィルムアート社

三二〇〇円

今月の  
おすすめ

実用書  
地図・旅行書

おそろロシアに行ってきた

嵐よういち著

この本で初めて知った「おそろロシア」という言葉。しかし日本の常識では理解したい奇想天外なロシアの動画が。数年前よりネットにアップされ、そう呼ばれているらしい。

著者は男二人で、夏と冬の広大なロシアの六ヶ所を回って取材した。ウラジオストック、樺太、カリーニングラード、モスクワ、サンクトペテルブルク、イルクーツク。やはり日本では考えられないような事件や、マズイご飯、汚いトイレ、怒りっぽい女性、極寒の気候、様々な困難が立ちはだかる。

旅から帰って来てみれば、何故かは分からないが、ロシアが好きになっていた、と語る。愛想は良くないが優しい人々、町の歴史的厚重感、ロシア語が最低限話せればもつと楽しかったろう、と旅から帰ってすぐ次の旅に思いを馳せていた。

彩図社

一二〇〇円

青春18きっぷの教科書

「旅と鉄道」編集部編

青春18きっぷは、JRの普通列車乗り降り自由五回分が一枚になったきっぷで、一枚が一万一八五〇円。一人一回分あたり二三七〇円と格安になるので、旅のお得なきっぷとして知られている。JRの普通列車と快速列車の乗り降りが自由になり、線路が続く限りどこまでも行くことができる。とことんひとり旅も、仲間と分け合つてのグループ旅も、行く先も乗る列車も自由に決めることができる、それが「青春18きっぷ」。

教科書というだけあって、内容は「青春18きっぷ」のキホンルール、旅の裏ワザ、駅近の名城や名湯の紹介、おもしろ駅弁など盛りだくさん。「上野東京ライン」のグリーン車や夜行快速「ムーンスター」のグリーン車やルボも見どころで、魅力的な旅先紹介も読み応え満載。

「青春18きっぷ」は若者向けのきっぷではなく、十八歳の頃の気持ちのままにという意味を込めたきっぷだという。この夏ローカル線に乗って、ワクワクな旅

に出かけよう。

山と溪谷社

一六〇〇円

ソウルフード探訪

東京で見つけた異国の味

中川明紀著

著者が外国に旅行中、具合が悪くなった時に恋しくなったご飯と味噌汁。日本で暮らす外国人の人々に「あなたの国のソウルフードは何ですか？」と尋ねて回った結果、日本でも食べられる各国のソウルフードのお店を三十四ヶ所レポートしている。

その料理の歴史、材料、簡単な作り方、まつわる思い出やお店の紹介なども載っているんで、読んで食べたくなったら東京で味わうことも出来る。

さまざまな国の人にソウルフードを尋ねて歩く中で、最もよく聞いたのが、「おふくろの味」という言葉。食卓を友人や家族と共に囲み、おいしいご飯を食べる幸せをかみしめたい。思い出が国ごとに異なっていて、文化や国民性を色濃く感じ、その土地に行ってみたいと思わせる。

平凡社

一六〇〇円

# 今月の おすすめ

## 語学・辞典

### 英単語の語源図鑑

清水健二・すぎきひろし著

語源学習とは、英単語を構成する「パーツ（語源）」ごとに分けて考える方法である。語源のパーツには三種類ある。主に語の先頭に付き方向や位置関係・時間関係、強調や否定などを表すものが「接頭辞」。主に語の真ん中で意味の中核を表すものが「語根」。単語の最後に付いて単語の品詞の機能や意味を付加するのが「接尾辞」である。英単語の大半はこの語源によって成り立っている。日本語の漢字における偏や旁をイメージすると分かりやすいだろう。このように三種類の語源の知識があれば、語彙数を芋づる式に増やすことができる。

本書の語源学習法は、語源を手掛かりに単語を関連付けて覚える方法である。また、一単語につき一つのイラストが、イメージしやすく脳にインプットしやすいため、イラストが可愛いのもポイントだ。

イラストによって英単語や文法を分かりやすく明示化することに重きを置いた既刊が多くある両著者。本書のユニークな学習法が、語彙力を増やす手助けになるだろう。

かんき出版

一五〇〇円

### 翻訳地獄へようこそ

宮脇孝雄著

悩める翻訳者や海外文学好きの方に向けて書かれた本書は、一テーマ四ページと読みやすいコラムが三章立てで構成されている。テーマごとに、書影付きで書籍が掲載されており、実際に著者が参考にしたものを紹介している。

翻訳とは、単に外国語の「言葉」を訳すだけの作業ではない。外国語の「表現」を日本語の「表現」に置き換えることである。

本書では、より正確で魅力的な翻訳にたどりつくために、必要な文化背景を踏まえ、「表現」の翻訳とはどういうことかを試行錯誤しながら、実践的な翻訳の仕方を解説している。

翻訳の仕方はもちろんだが、読めば読むほど翻訳者の苦悩と葛藤そして面白さ

が伝わってくる。

アルク

一六〇〇円

### 表現マップで覚える！

韓国語日常フレーズ 初級

辛 昭静著

韓流ブームは終わったような気配があるが、実はそうではない。最近の k・p・o・p はとても盛り上がっている。ファンの年齢層がグッと下がり、韓国語の入門書売り上げはグッと上がっている。

そして入門を終えて次の段階に進みたい、会話も少し楽しみたい初級学習者にお薦めしたいのが本書である。もともと会話力を上達させる為の鍵は語彙力だが、著者は語彙力を高める為にひたすら単語を覚えるよりも関連する語彙を連想する形で覚えた方が効率的と言う。

テーマ別に関連する日常フレーズをマップ形式で提示し、そのフレーズを実際にどう使うのか初級レベルの文型を用いて提示している。入門から少しステップアップしたいという人に是非、開いて頂きたい一冊だ。

HANA

一八〇〇円

今月の  
おすすめ

児童書

どっせい！ねこまたずもう

石黒亜矢子作・絵 今日百年に一度の大相撲大会。最強妖怪決定戦です。勝った方がとり続けるこの相撲、負け知らずの横綱にゃんこのやまに、腕に覚えのある様々な妖怪たちが挑みます。果たして優勝できるのはだれなのでしょう。テンポの良いくりかえしの展開と、大迫力の絵が楽しい絵本です。ねこをもじった技名と、最後の絵にもぜひ注目してください。ポプラ社 一四〇〇円

うだわってごんごん

村上しいこ作 陣崎草子絵

物知りで時々「こだわりスイッチ」が入るそうまくんは、主人公えるの大切な友達です。ある日えるはそのスイッチに触れ怪我をし、お母さんからそうまくんともう遊ばないようにと言われてしまいます。それでも一緒に遊びたいえるは、友だちのかんちゃんを巻き込みお母さ

んにはれない作戦を考えます。友達とは何かを考えさせられるお話です。

学研プラス

一三〇〇円

モンゴル大草原800年

イチナンノロブ・ガンバートル文

バーサンスレン・ポロルマー絵

津田紀子訳

「モンゴル人は馬上で育つ 馬のいない人生は つばさのない鳥のよう」と冒頭の一文が象徴するように、モンゴル人の暮らしは馬たちと共にありました。大草原を駆けまわる遊牧生活、モンゴル帝国の繁栄やのちの社会主義時代、近年の経済成長による急激な生活様式の変化まで八〇〇年の歳月を絵本で辿ります。

福音館書店

二〇〇〇円

ケンタウロスのポロス

ロベルト・ピウミーニ作 長野 徹訳

英雄ヘラクレスと出会った孤独な若きケンタウロスのポロスは、ある災いから逃れるため故郷を離れ、旅に出ます。それは様々な人々と出会い、広い世界を知り、己の運命を切り開く知恵や知識を得る、学びと探求の旅でもありました。最

高神ゼウスや海の神ポセイドンなど神話の神々も登場する、古代ギリシヤを舞台にした新しい「行きて帰りに物語」です。

岩波書店

一八〇〇円

かんがえる子ども

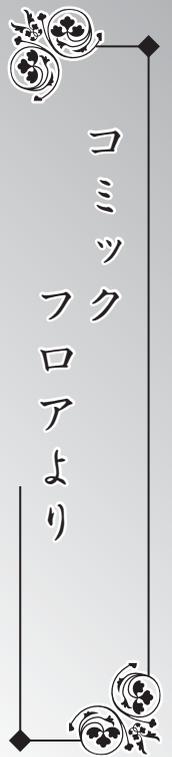
安野光雅著

こどもの世界は・学ぶことは・考えるとはと語っていき、自分で考え自分の考えを持って欲しいとの著者の思いが詰まっています。画家になった著者の初めての絵本は、こどものとも『ふしぎなえ』でした。その頃エッシャーのだまし絵が面白くて描いたと言いますが、著者の世界を作りだしています。著者の絵本の多くは何回見ても発見や考える楽しさがあり、このエッセイに繋がっています。

福音館書店

一〇〇〇円





## コミックフロアより

—第12回—

コミック売り場よりこんにちは！  
大人も子どもも、親子で一緒に楽しめる  
メディア化したマンガ作品を今回も紹介い  
たします。

『約束のネバーランド』  
(集英社／白井カイウ原作／出水ぽすか  
作画)

孤児院・グレイス＝フィールドハウス。  
ママと暮られるシスターとともに孤児たち  
が仲良く暮らしていた。子どもたちは六歳  
から十二歳までの間に里親の元に巣立って  
いく。ある日里親が見つかり出ていくこと  
になったコニーが大切なぬいぐるみを忘れ  
ていったため、身体能力に優れたエマと知  
能に優れたノーマンは急いで届けるために  
近づいてはいけなさとされている「門」に  
行く。そこで二人が見たものは、食肉とし  
て出荷されるコニーと「鬼」の存在だった。  
孤児院ではなく人間飼育場だったと知り、

博識のレイも仲間になって孤児全員の脱獄  
計画を考えはじめる。しよっぱなからピッ  
クリさせる展開ですが、ストーリーにどん  
どん吸い込まれていきます。連載雑誌の週  
刊少年ジャンプでも大人気の作品が二〇  
一九年一月、ついにアニメ化決定！これ  
は必読です！



『約束のネバーランド』

『はたらく細胞』(講談社・清水茜作)

ここはあるヒトの体内。酸素を運搬して  
いた新米の赤血球は迷子になり肺炎球菌に  
襲われる。街(体内)を襲う肺炎球菌に白  
血球が駆けつける！そう、これは体内の  
細胞を擬人化した作品。みなさんの体内で

彼ら彼女ら細胞が一生懸命働いているんで  
すよ！そんな擬人化作品が今年七月より  
アニメ化放送中。さらに十一月には舞台化  
も決定しました。

スピントフもたくさん出ていて、『はた  
らく細胞』(腹痛やニキビなどができる  
と  
き働く善玉菌や悪玉菌の擬人化)『はたら  
かない細胞』(赤血球になる前の赤芽球、  
働かない擬人化赤芽球の日常コメディ)『は  
たらく細胞BLACK』(暴飲暴食など不  
健康な身体、まさに劣悪な環境で働く細胞  
の擬人化)などなど興味深いものばかり。  
この作品を読めば自分の身体がより愛おし  
くなること間違いなし！



『はたらく細胞』

『透明なゆりかご』(講談社・沖田×華作)

看護学科の高校三年生・×華は、母親の  
勧めで産婦人科の見習い看護師として働く  
ことになる。産婦人科には中絶のために来  
る人もいれば出産する人もいる。中絶の現

場を目の当たりにして辞めようかと考えるが、出産の現場で命の力強さを知り仕事を続ける決意をする、ひとりの感性豊かな少女の目線から命とは何かを問い見つめていくこの作品。今年七月より二十二時～NHK総合でドラマ放映中。

この作品がまさかNHKでドラマ化するなんて！と驚きましたが、ものすごく心に響く作品なのでぜひ読んでいただきたいです。命の重さを考え直すことのできる素敵な作品です。

### 『夕風の街、桜の国』

(双葉社・ここの史代作)

広島原爆を題材にしたこの物語は、二つの作品で年代が変わります。

「夕風の街」は原爆投下から十年後、被爆して生き延びた皆実は社会人として母のフジミと二人暮らし。疎開したまま戻らなかった水戸に住む弟に会いに行くため貯金をしている。普通の暮らしをしていてもいつどこか心の中で被爆体験を消化しきれず、原爆を落とした側から死ぬように望まれたにもかかわらず生きている自分に罪悪感を持つ中、被爆症に苛まれる。

「桜の国」は二部に分かれている。一部

は昭和六十二年東京。中野に住む小学生の女の子・七波は鍵っ子。祖母のフジミは喘息持ちで入院をしている弟の風生の見舞い、父は仕事で留守。見舞い帰りにふざけて仮病を使った七波は祖母に怒られるがなぜか父は怒らなかつた。二部は平成十六年、二十八歳になった七波は散歩と称して何日も家に戻ってこない父を尾行して広島にたどりつく。

この作品は八月六日にNHK総合でドラマ化されます。原作とは少し設定が違うところもありますが大筋は同じ。単発ドラマなので見られない方もあるかも知れませんが、コミックでもこの作品の良さは十分味わえると思います。興味を持たれた方はぜひ手にとってみてください。



『夕風の街、桜の国』

### 『この世界の片隅に』

(双葉社・ここの史代作)

昭和十八年十二月、広島市に住んでいる

想像力豊かで絵が上手なずの元に呉市に住む周作との縁談が持ち上がる。翌年二月、周作に嫁いだずは呉での新しい生活を始める。この作品は一度紹介したのですが二〇一六年の映画が大ヒットして更に注目を浴びました。そして今度はTBS日曜劇場で七月十五日からドラマ化。既に紹介してありますが『夕風の街、桜の国』(以下「夕風」に略)を紹介したからには再度ここに入れる理由があるんです。本作は「夕風」のあとにここの史代さんが描いた作品です。「夕風」は広島原爆そのものを描いた作品ですが、原爆以外の死や戦争全体にもう一度向き合えないとバランスが取れないという著者が、激しい空襲の被害を受けた呉を舞台に戦争全体像を描いた作品です。なので、「夕風」とセットで読んでいただきたいです。

今回は八月号なので、戦争を題材にした作品を取り上げました。特にここの史代さんの作品は、すべての方に読んでいただきたいものです。それ以外にもちろんオススメばかりのメディア化作品。ぜひコミック売場に探しに来てくださいね。

(M&J梅田店・八木泉)

# ATION

<p>丸善            ≡ 名古屋本店 ≡            ☎(052)238-0320            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 名古屋栄店 ≡            ☎(052)212-5360            [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善            ≡ 名古屋セントラルパーク店 ≡            ☎(052)971-1231            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ ロフト名古屋店 ≡            ☎(052)249-5592            [営業時間] 10時半～20時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 名古屋店 ≡            ☎(052)589-6321            [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善            ≡ 岐阜店 ≡            ☎(058)297-7008            [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善            ≡ 四日市店 ≡            ☎(059)359-2340            [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 滋賀草津店 ≡            ☎(077)569-5553            [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善            ≡ 京都本店 ≡            ☎(075)253-1599            [営業時間] 11時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 京都店 ≡            ☎(075)252-0101            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店            ≡ 高槻店 ≡            ☎(072)686-5300            [営業時間] 10時～22時</p> <p>MARUZEN &amp; ジュンク堂書店            ≡ 梅田店 ≡            ☎(06)6292-7383            [営業時間] 10時～22時</p> <p>丸善            ≡ 八尾アリオ店 ≡            ☎(072)990-0291            [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善            ≡ 高島屋大阪店 ≡            ☎(06)6630-6465            [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 大阪本店 ≡            ☎(06)4799-1090            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 難波店 ≡            ☎(06)4396-4771            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 天満橋店 ≡            ☎(06)6920-3730            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 上本町店 ≡            ☎(06)6771-1005            [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 近鉄あべのハルカス店 ≡            ☎(06)6626-2151            [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 奈良店 ≡            ☎(0742)36-0801            [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店            ≡ 西宮店 ≡            ☎(0798)68-6300            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 芦屋店 ≡            ☎(0797)31-7440            [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 神戸住吉店 ≡            ☎(078)854-5551            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 三宮駅前店 ≡            ☎(078)252-0777            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 三宮店 ≡            ☎(078)392-1001            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 神戸さんちか店 ≡            ☎(078)335-2877            [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 舞子店 ≡            ☎(078)787-1250            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 明石店 ≡            ☎(078)918-6670            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 姫路店 ≡            ☎(079)221-8280            [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善            ≡ 岡山シンフォニービル店 ≡            ☎(086)233-4640            [営業時間] 10時～20時</p>	<p>丸善            ≡ 広島店 ≡            ☎(082)504-6210            [営業時間] 10時～22時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 広島駅前店 ≡            ☎(082)568-3000            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 高松店 ≡            ☎(087)832-0170            [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 松山店 ≡            ☎(089)915-0075            [営業時間] 10時～21時</p> <p>丸善            ≡ 博多店 ≡            ☎(092)413-5401            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 福岡店 ≡            ☎(092)738-3322            [営業時間] 10時～21時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 大分店 ≡            ☎(097)536-8181            [営業時間] 10時～20時</p> <p>丸善            ≡ 天文館店 ≡            ☎(099)239-1221            [営業時間] 10時～20時半</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 鹿児島店 ≡            ☎(099)216-8838            [営業時間] 10時～20時</p> <p>ジュンク堂書店            ≡ 那覇店 ≡            ☎(098)860-7175            [営業時間] 10時～22時</p>
---	---	--	---

<p>MARUZEN &amp; ジュンク堂書店  <b>＝ 札幌店 ＝</b>            ☎(011)223-1911            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善  <b>＝ 水戸京成店 ＝</b>            ☎(029)302-5071            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>MARUZEN &amp; ジュンク堂書店  <b>＝ 渋谷店 ＝</b>            ☎(03)5456-2111            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ プレスセンター店 ＝</b>            ☎(03)3502-2600            [営業時間] 11時～19時</p>
<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 旭川店 ＝</b>            ☎(0166)26-1120            [営業時間] 10時～19時半</p>	<p>丸善  <b>＝ 丸広百貨店飯能店 ＝</b>            ☎(042)973-1111            [営業時間] 10時～19時</p>	<p>丸善  <b>＝ 丸の内本店 ＝</b>            ☎(03)5288-8881            [営業時間] 9時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 大泉学園店 ＝</b>            ☎(03)5947-3955            [営業時間] 10時～22時</p>
<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 弘前中三店 ＝</b>            ☎(0172)34-3131            [営業時間] 午前10時～午後7時</p>	<p>丸善  <b>＝ 丸広百貨店東松山店 ＝</b>            ☎(0493)23-1111            [営業時間] 10時～19時</p>	<p>丸善  <b>＝ 日本橋店 ＝</b>            ☎(03)6214-2001            [営業時間] 9時半～20時半</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 吉祥寺店 ＝</b>            ☎(0422)28-5333            [営業時間] 10時～21時</p>
<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 盛岡店 ＝</b>            ☎(019)601-6161            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 大宮高島屋店 ＝</b>            ☎(048)640-3111            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善  <b>＝ お茶の水店 ＝</b>            ☎(03)3295-5581            [営業時間]            月～金10時～20時半            土10時～20時            日・祝10時～19時</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 立川高島屋店 ＝</b>            ☎(042)512-9910            [営業時間] 10時～21時</p>
<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 秋田店 ＝</b>            ☎(018)884-1370            [営業時間] 10時～20時</p>	<p>丸善  <b>＝ 桶川店 ＝</b>            ☎(048)789-0011            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善  <b>＝ 多摩センター店 ＝</b>            ☎(042)355-3220            [営業時間] 10時半～21時</p>	<p>丸善  <b>＝ 横浜みなとみらい店 ＝</b>            ☎(045)323-9660            [営業時間] 11時～20時</p>
<p>丸善  <b>＝ 仙台アエル店 ＝</b>            ☎(022)264-0151            [営業時間] 10時～21時            日・祝10時～20時</p>	<p>丸善  <b>＝ 津田沼店 ＝</b>            ☎(047)470-8311            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善  <b>＝ 有明ワンザ店 ＝</b>            ☎(03)5530-5701            [営業時間] 10時～19時半</p>	<p>丸善  <b>＝ ラゾーナ川崎店 ＝</b>            ☎(044)520-1869            [営業時間] 10時～22時</p>
<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 仙台TR店 ＝</b>            ☎(022)265-5656            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善  <b>＝ 舞浜イクスピアリ店 ＝</b>            ☎(047)305-5808            [営業時間] 11時～21時            土・日・祝10時～21時</p>	<p>丸善  <b>＝ メトロ・エム後楽園店 ＝</b>            ☎(03)5684-5130            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 藤沢店 ＝</b>            ☎(0466)52-1211            [営業時間] 10時～21時</p>
<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 新潟店 ＝</b>            ☎(025)374-4411            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 南船橋店 ＝</b>            ☎(047)401-0330            [営業時間] 10時～21時</p>	<p>丸善  <b>＝ 新宿京王店 ＝</b>            ☎(03)5321-8327            [営業時間] 10時～20時</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 岡島甲府店 ＝</b>            ☎(055)231-0606            [営業時間] 10時半～19時</p>
<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 郡山店 ＝</b>            ☎(024)927-0440            [営業時間] 10時～19時</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 柏モディ店 ＝</b>            ☎(04)7168-0215            [営業時間] 10時半～20時</p>	<p>ジュンク堂書店  <b>＝ 池袋本店 ＝</b>            ☎(03)5956-6111            [営業時間] 10時～22時</p>	<p>丸善  <b>＝ 松本店 ＝</b>            ☎(0263)31-8171            [営業時間] 10時～20時</p>
			<p>MARUZEN &amp; ジュンク堂書店  <b>＝ 新静岡店 ＝</b>            ☎(054)275-2777            [営業時間] 10時～21時</p>

営業時間は変更する場合がございます。ご了承ください。

定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

# ブックブレスター



## 編集後記

六月二十三日から約半年間、ジュンク堂書店池袋本店にて「作家書店」第二十七代目店長・柄谷行人書店が開催されている。柄谷行人選書リストのお問い合わせもいたただくので、本誌でも三回に分けてそのリストを掲載する。

(緒)

## 投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。四〇〇字×六〇〇字程度で、おすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名(ペンネーム可)、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承ください。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五六一

丸善ジュンク堂書店「書標」編集室係

TEL〇三―五九五六一六一―

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。

定期購読料 年間二二〇〇円(送料込)  
現金書留もしくは八十二円切手十五枚で

お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二一五六一

丸善ジュンク堂書店特急係

TEL〇三―五九五六一六一―

FAX〇三―五九五六一六一―



QRコード

PC・スマートフォンから  
<http://www.junkudo.co.jp/>



## 「通勤時間と読書」

現在の店舗に移って一年半以上経ちました。通勤時間は片道一時間半前後を要します。直前の店舗は三十五分、その前も五十分ぐらいでしたのでかなり遠くなりました。そのため異動の際には皆から「通勤時間が長くなると読書もたくさんできていいね」と口を揃えたかのように言われたのを思い出します。

しかし現実とは違いました。三回の乗り換えが十分刻みであり、乗り換えは歩くしホームの待ち時間も意外とあり、電車に乗ると疲れて何もできません。使用している四路線のうち最後の一つだけ三十分近く乗車しますが、どんなに頑張っても寝落ちしてしまいます。ゾクゾクする小説も興味深いノンフィクションも抵抗

できません。結局電車の中ではほとんど読めずにいます。

休憩時間に読むことができれば良いのですが、新聞を読んで終わっています。新聞は記事だけでなく書籍の広告もあって、仕事柄読まずにいられません。

そこで家に帰って読むうとなります。しかし、通勤時間が長くなることで家にいる時間が減るうえ、家族との時間も大切に。結局睡眠時間を多少削って時間を捻出するか、休みの日にまとめて読むかとなります。嵌ってしまった一区切りするのが難しい作品に出会った時はなかなか眠れず、きびしい時があります。この流れで電車内は眠ってしまい、読書ができない悪循環になったのでしょうか。通勤時間が短かった頃は短時間でも電車で読書していましたし、喫茶店に寄って少し読書してから帰ることもできました。

時間は貴重であることをさらに痛感し

て、休みの日は睡眠の満足より早く起きて何かすることを取るようになりました。

私の観察では通勤電車の七人掛けのロングシートでは平均して二人は読書を読んでいます。私とは逆に、限られた時間の中で車内を選択され読書されていると思います。読む本も貴重な時間を使っている書店に足を運んでくださり選んでいただいていると想像できます。

スタッフには常々、お客様自身で本を探し出せる売場づくりをしようと呼んでいます。それは検索で見つけ易くする整理だけではなく、巷で話題の本や売れている本が自然とわかる陳列をするなど、お客様の貴重な時間を少しでも無駄にせず本を提供できる店にしたいと考えております。目指すところにはまだまだ至りませんが、今後とも努めてまいります。

(K)

## 「書標 ほんのしるべ」 第47号

編集・発行人 工藤 恭孝

発行所 榎丸善ジュンク堂書店

印刷所 榎丸 旺社

二〇一八年八月五日発行 頒価五十円（本体四十六円）

〒160-0008

〒653-0012

東京都新宿区三栄町二十九 ニューワールドビルディング

神戸市長田区一番町四丁目二十七番地

「書標 ほんのしるべ」昭和61年7月15日第三種郵便物認可  
2018年8月5日発行（毎月1回5日発行 通巻第477号）



日本全国で  
3,000万冊の品揃え!  
丸善ジュンク堂書店

頒価 五十円（本体 四十六円）

ジュンク堂書店

淳久堂書店

M MARUZEN